

大講義室における双方向的授業の試み

附属教育実践総合センター・太田佳光

1、本授業の工夫と概要

本授業は、教職に関する必修の専門科目であり、本年度より開講された講義である。教育学部の3回生（A・B）135名と大きなサイズの授業であるが、学生の主体的な学びを促進するために、双方向的な授業を試みた。

双方向的授業を実践するために、以前から利用していた「大福帳」というA4版の出席カードを使用した。「大福帳」には、授業回数分のコメント記入欄が設けられ、毎回授業終了後に、授業への感想や質問などを学生が記入し、次回授業時に学生に返却するものである。この出席カードの使用により、授業時に学生がどのようなことを考えているかを知ることができ、次回の授業にその内容を生かすことが可能となる。また、学生の質問などに個別に対応できるため、より細やかな指導が可能となる。

また、学生たちのより主体的な授業参加を促進するために、随時「バズ学習」的な話し合いを行い、その結果を全体に述べさせた。さらに、教育実習終了後の講義であることから、教職に対するポジティブな取り組みが可能となるよう、教育現場の課題だけではなく、教職のやりがいや面白さを伝えようと考え、そうしたドキュメントなどの資料を積極的に使用した。

なお、本授業は学部のディプロマ・ポリシーの「教育に関する確かな知識と、得意とする分野の専門的知識を有している。」項目に関係する。

授業概要は、以下の通りである。

- 第1回：特別活動とは何か
- 第2回：特別活動の特質と実践
- 第3回：特別活動の現代的課題とは
- 第4回：特別活動の理論（1）教師の勢力
- 第5回：特別活動の理論（2）集団論
- 第6回：特別活動の実践（1）学級づくり1
- 第7回：特別活動の実践（2）学級づくり2
- 第8回：総括と試験

2、学生評価と今後の課題

学生評価は、本講義に対して自由にコメントを

書いてもらう方法により実施した。

まず、本講義を受講して得た特別活動の専門的知識について言及してあるコメントを紹介したい。

・「今まで教育実習に行った時などは、どうやって授業をするかということばかりが頭の中にありましたが、特別活動論を受けてから、まず学級が成り立った上に授業があり、学級経営が重要だという事を再認識しました。」

・「自分の学生時代の（特別活動に関する）体験が、どのようなメカニズム、理論によって説明できるのかということを知ることができた。」

このように、これまでの体験を、本講義の専門的知識の習得により、自身のリフレクションにつなげているコメントを多く見ることができた。さらに専門的には、以下のような、特別活動の実践技術に対するコメントも多くみられた。

・「エンカウンターは、学級開きなどのアイスブレイキングのようなイメージが強かったが、日常的に生徒の様子を見て、必要なエンカウンターを行い、よりよい集団づくりに生かしていけることが分かった。」

さらに、教師のやりがいを高めようとした意図については、以下のようなコメントがあった。

・「この講義で取り扱ったものは、自分のモチベーションを上げるものばかりで、とても関心をもって取り組めた。」

・「教師というのはとても大変な仕事であると同時に、やりがいを感じられる仕事であるという事を感じる講義であった。」

授業全体に関しても、比較的良好なコメントが多かったが、ねらいとしていた双方向的な授業に関しては課題が残った。大人数の講義で、どれほど、教師と学生の、そして学生相互のコミュニケーションを高めていくのかが問われていると思う。最後に、手前みそであるが、以下のようなコメントを。

・「色々な授業の中で、この授業が一番好きだった。おしつけがましくない先生の雰囲気と内容がとてもよかった。」

